

兀良哈征討軍と土木の変

The Military Expedition by Ming Dynasty to the Uriyangkhad and The TuMu Incident

川 越 泰 博

要 旨

正統十四年（一四四九）七月、長城がモンゴル軍に侵犯されたという情報に接すると、中国の明王朝では、英宗の親征をたちどころに決定した。親征の準備は、着々と進められ、十六日には北京を進発した。まさに電光石火のような早業の進発をなしたのは、五年前の正統九年（一四四四）における兀良哈征討の成功体験を、もう一度英宗自身の手で再現しようと企図し、その準備がかねてから十分なされていたからであろう。ところが、英宗親征軍が編制されたときには、兀良哈征討軍はそれに組成されなかった。そのため、同年八月十五日における土木の変での覆滅を免れ、変後の京師防衛戦に再出軍して、モンゴル軍相手に様々な軍功をえて陞進することとなった。

キーワード

英宗親征軍、親軍衛、京衛、外衛、京師防衛戦

親征軍の壊滅——明廷の百官たちがこの重大きわまる衝撃的な敗報を耳にしたのは、正統十四年（二四四九）八月十七日のことであつた。宮城に集まつた百官たちは、知りえた情報をひそかに交換し、愁怨驚懼した。紫陌（首都の道路）に出ると、満身創痍で血に塗れた軍士たちが、足を引きずりながら、帰ってくるのがみえた。敗残の軍士が、続々と引き上げてくるのを目の当たりにして、敗北を信じない者は、もはやだれもいなかった。が、英宗については、だれもその所在も生死のほども知らなかつた。

事の始まりは正統十四年（二四四九）七月十六日のことである。この日、英宗の率いる明の大軍が都北京を出発した。皇帝自身が率いる軍隊を親征軍というが、英宗親征軍の中核をなしたのは、五軍・神機・三千營からなる京營の軍隊であつた。出発に先立って、八十万という兵器の調達がなされ、軍隊には、行軍手当てともいふべき行糧が一ヶ月分として、個々に支給された。英宗の親征軍が決定したのは、そのわずかに五日前の十一日のことであつた。この日、重大な緊急情報が明廷に届いた。エセン（也先）の率いるオイラト（瓦剌）モンゴル軍（以下、モンゴル軍と略称）が四路に分かれて、明に侵寇してきたというのである。その状況について、正統・景泰・天順期の編年史料である『英宗実録』正統十四年七月己丑（十一日）の条には、

是の日、虜寇するに分道し、期を刻して入寇す。也先は大同に寇し、猫兒庄に至る。右參將呉浩、迎戦して敗死す。脱脱卜花王は遼東に寇す。阿剌知院は宣府に寇し、赤城を囲む。又別に人を遣わし甘州に寇せしむ。諸守將、城に憑り拒守す。報至るや、遂に親征を議す。

と書き記されている。モンゴルの首脳たちは、それぞれの侵寇地点に狙いを定めて、一斉に軍馬を進めてきたのであった。雪崩を打ったようなモンゴル騎馬軍の勢いの前に、明代長城の防衛線は、なすすべもなくつぎつぎに破られた。それは、七月八日のことであった。その報が、十一日に明廷に届いたのである。

だがしかし、中国に深く攻め入るには十分な準備がなく、四路の侵寇軍は、みな沿辺を一通り蹂躪すると、いったんは引き上げたのであった。だから、モンゴル軍は、この侵入が歴史上稀にみる大事件を誘発するとは夢想だにできなかった。

ところが、長城が侵犯されたという情報に接すると、それに呼応するかのようには、中国の明王朝の方では、英宗の親征をたちどころに決定したのであった。親征の準備は、着々と進められた。翌十五日には、英宗が都を離れている間の留守役として、異母弟の郕王祁鈺は「居守」に、駙馬都尉の焦敬がその輔佐に任命された。さらに同日、英宗に扈從するメンバーが発表された。『英宗実録』その他の史料から、その人名を拾い出すと、つぎの通りであった。

太師英国公張輔・太保成国公朱勇・鎮遠侯顧興祖・寧侯陳瀛・恭順侯呉克忠・駙馬都尉石璟・駙馬都尉井源・平鄉伯陳懷・遂安伯陳瑱・広寧伯劉安・襄城伯李珍・修武伯沈榮・建平伯高遠・永順伯薛綬・忠勇伯蔣信・左都督梁成・右都督李忠・都督王貴・都督同知王敬・都督僉事陳友安・都督僉事朵兒只・戸部尚書王佐・兵部尚書鄭瑩・刑部右侍郎丁鉉・工部右侍郎王永和・吏部左侍郎兼翰林院學士曹鼎・都察院右副都御史鄧縉・翰林院侍讀學士張益・通政司右通政龔全安・通政司左參議欒懌・太常寺少卿黃養正・太常寺少卿戴慶祖・太常寺少卿

王一居・大理寺右寺丞肅維禎・大理寺左寺副馬豫・太僕寺少卿劉容・鴻臚寺掌寺事礼部左侍郎楊善・鴻臚寺左寺丞張翔・光祿寺署丞鄧鑑・尚宝司少卿凌壽・給事中包良佐・給事中姚銑・給事中鮑輝・中書舍人兪拱・中書舍人潘澄・中書舍人錢昂・監察御史張洪・監察御史黃裳・監察御史魏貞・監察御史夏誠・監察御史申祐・監察御史尹竑・監察御史童存德・監察御史孫慶・監察御史林祥鳳・郎中齊汪・郎中馮學明・郎中滕員・郎中雷潛・員外郎王健・員外郎程思溫・員外郎程式・員外郎遼端・主事兪鑑・主事張瑋・主事鄭瑄・主事陳銑・主事周傑・行人司正尹昌・行人羅如墉・欽天監正彭德清・欽天監夏官正劉信・序班李恭・序班石玉

このような陣容からわかるように、親征は、朝廷そのものがそっくり移動するようなものであった。したがって、皇帝の行った先は、行在所と呼ばれた。

英宗が親征するにあたって、郕王祁鈺を「居守」に任じたことは、さきにふれたが、それは全権を委ねるというものではなかった。英宗が親征することになったとき、礼部が上奏して英宗の裁可を得た「居守事宜」の一条に、在京在外の各衙門で緊急重大な事があれば、英宗のいる行在所まで使者を遣わして聖断を仰ぎ、その他の事項については、英宗の帰京を待つて裁可を受ける、とある。これは、都を離れても、意思決定権は、皇帝自身が握っていることを如実に示すものであった。郕王が「居守」に任命されたといっても、何ら権限は付与されていなかったのである。

一方、英宗親征用としての軍の編成も行われた。明代軍事制度の基幹をなすのは、衛所であった。衛は、五千戸所から構成された。衛の種類としては、三種に区別することができる。京師に置かれた親軍衛と京衛、それに地方

に設置された外衛の三種である。親軍衛は、兵部に領せられ、専ら侍衛・宮城守衛・皇陵護衛・皇城巡察の任にあたった。京衛は、五軍都督府（五府）に隷属した。外衛は、行政を掌る布政司、司法を掌る按察司とともに軍事を掌る機関として地方に置かれた都指揮司（都司）に統べられ、都司は五府に隷属した。

京衛は、永楽朝以後、班軍番上する外衛とともに常設的營、すなわち京營を組織するにいたった。通常、軍事展開を行う場合は、永楽帝の創設にかかる、京衛と班軍番上する外衛によって構成された京營、具体的にいえば、五軍營・三千營・神機營からなるいわゆる三大營をもって組織された。

ところが、正統十四年（一四四九）における英宗の親征軍組成にあたって、その基礎となったのは、無論京營を構成する京衛と班軍番上する外衛とであるが、それのみならず、本来侍衛・宮城守衛・皇陵護衛・皇城巡察の任を職務とする親軍衛もまた組み込まれた。このように、英宗の親征軍は、通常の軍事的行動とは異なつて、京營に親軍衛を加えて編成されたのであった。まさにそれは、この出兵が「親征」であつたからにはかならない。皇帝が行くところであれば、それが地方であれ、戦場であれ、どこにでも皇帝に扈従するのが、皇帝侍衛という重大な任務を帯びた親軍衛の姿であつた。以上にみたように、英宗の親征軍は、京衛と外衛と親軍衛の三軍種を動員して組成されていた。その数、五十万と号した。

かくして、親征軍は、十六日、北京を進発した。親征軍の組成が決定したのは十一日、そしてその出発は十六日。まさに電光石火のような早業の進発をなしえるために最低限必要なことは、編成・装備・武器ならびに兵糧の調達、その他もろもろの準備である。動員する軍事力が大きければ大きいほど、その準備に要する日子も大きいこととなる。それにもかかわらず、モンゴル軍の対明侵寇からわずか五日後に親征軍が進発したことは、かかる準備

をすでに済ませていたことを意味する。「行糧」は一ヶ月分、兵器は八十万用意されていた。モンゴル軍を凌駕し、完全な勝利をうるためには、大軍の動員・編成が絶対的な必要事項であり、英宗の侍衛上直軍たる親軍衛は勿論のこと、京営を組成する在京の京衛と番上のために上班した在京の衛所、それに加えて元来班軍の任務のない衛所、しかも必ずしも京師に近接しているとはいえない地域の衛所まで動員し、数十万という大軍を編制している。

これは、関係悪化の一途を辿るモンゴルに対して、普段からその準備をしていたとも考えられるが、五年前の正統九年（一四四四）における兀良哈征討の成功体験を、もう一度英宗自身の手で再現しようと企図したその結果ではないかとも推察される。それが親征軍編制とその出軍の理由であろう。これに対して、明廷の高官たちは、十四日に反対を表明した。吏部尚書王直が先頭に立って、廷臣等とともに親征反対の上奏をしたのである。その間、二日の時間的空白がある。これは、皇帝親ら出征することには反対という意味での「親征反対」であり、特段、モンゴル征討軍の派遣自体に対する反対を意味するものではなかったのではないかと思われる。英宗がそうした反対を押し切って親征を執行したのは、親征軍の勝利を絶対的に確信していたからであり、全く何の不安も抱いていなかったことを意味する。さらにいえば、この親征軍は十全な準備を終えていたということになる。¹⁾

それでは、英宗がモンゴル軍に対する親征軍の絶対的勝利の確信を抱いた根拠と推測される正統九年（一四四四）における兀良哈征討の成功体験とはいかなる戦いであったのだろうか。成国公朱勇等が兀良哈征伐の勅命を拝受したのは、同年春正月二十一日のことであった。その三日後の二十四日には、守備独石永寧左參將都督同知楊洪等に対して兀良哈征伐の勅命が降った。朱勇等の兀良哈征伐軍は、

【表A】

仮称	将帥	監軍	出発地	会同地
第一軍	成国公朱勇・恭順侯呉克忠	太監僧保	喜峯口	黄河・土河の両又口
第二軍	興安伯徐亨	太監曹吉祥	界嶺口	同上
第三軍	都督馬亮	太監劉永誠	劉家口	同上
第四軍	都督陳懷	太監但住	古北口	同上
別働隊	遼東総兵官都督僉事曹義		同上	

と四軍ならびに別働隊から編制され、第一軍から第四軍（この名辞は筆者の附した仮称）それぞれ指定された出発地から会同地とされた黄河・土河の両又口に向けて行軍を開始し、遼東総兵官都督僉事曹義等が率いる別働隊は素敵を受け持った。その結果を受けて四軍が兀良哈を殲滅するという策戦であった。

一方、その三日後に勅命を拝受した楊洪等はそれと連動する形で、楊洪は独石から、石亨は大同から、朱謙・宋謙・孫安は万全から出師し、楊洪は開平衛衛所官軍を、朱謙・宋謙・孫安は宣府前衛衛所官軍を、石亨は蔚州衛衛所官軍をその麾下に組み込んだ。三地点から行軍を開始した楊洪と朱謙・孫安と石亨がそれぞれ率いる明軍は以克列蘇（克列蘇）において兀良哈を摧破・擺落させた。楊洪が克捷報告をしたのは、同年二月戊子（八日）のことであったので、わずかに二週間後のことであった。四軍から兀良哈征伐軍も朱勇の第一軍以外は赫奕たる戦果をあげた。主力各軍の計画的配置、会同地の決定、親征軍でないにもかかわらず親軍衛が投入されたこと等、この兀良哈征討は突発的におこなわれたのではなく、きわめて周到な準備の下で大規模に企図されたものであった。^②

正統九年（一四四四）における明軍の兀良哈征討は、軍事的にみてこのように評価できるが、かかる兀良哈征討軍は、その後、

①五年後の正統十四年（一四四九）七月の英宗親征においては親征軍に編制編入されたもの、

②その一ヶ月後、英宗はモンゴル軍の捕虜となるという前代未聞の出来事が発生した八月十五日の土木の変以後の京師防衛戦等の戦いに動員投入されたもの、

③上記の①②のいずれにも関わりがなかったもの、

の三通りに分けられる。そこで、兀良哈征討軍の五年後の動向を知る素材として、正統九年（一四四四）の明軍の兀良哈征討に関わったことが著明な事例を挙例すると、巻末の【付表】「兀良哈征討軍当事者一覧」のごとく一七七例となる。

これらは、正統九年（一四四四）における兀良哈征討の際に行われた戦地名を探り出し、それらに基づいて検出したものである。その典拠史料は『中国明朝档案総匯』に収録されている一〇二の衛所の衛選簿である。これらは、正統九年（一四四四）という紀年を伴って、以克列蘇（または、克列蘇）という用語の他、数多の戦地名が頻出する。^③これらの用語を渉獵して、兀良哈征討に関わった当事者の名前を挙げ、それに土木の変に関わる事項、すなわち親征との直接関わりの有無、変後の京師防衛戦に関わる戦闘場所、土木の変以前の職官と以後の職官等を明記した。したがって、この表に基づけば、明兀良哈征討軍の土木の変との関わりが多面的に掘り起こせることになる。

さて、さきに述べたように、兀良哈征討軍は、正統十四年（一四四九）段階においては、①英宗親征軍に編制編

入されたもの、②土木の変以後の京師防衛戦等の戦いに動員投入されたもの、③上記の①②のいずれにも関わりがなかったものに大別される。その仕分けに基づいて事例一七七件をみてみよう。

まず、③の親征軍にも京師防衛戦にも無関係であった事例は、1・2・3・21・38・58・76・78・88・90・95・107・108・111・112・113・114・115・116・117・121・127・128・132・133・135・137・138・139・142・143・147・148・149・153・154・157・170・172・174・177の四十一件ある。これは事例一七七件から見ると、二三・一六%を占めることになる。これらは全一七七事例が現存衛選簿のみから検出したという一定の制約があるので、無関係の事例四十一件の多寡を判断・評価することは難しい。兀良哈征討軍と土木の変との関わりについては無関係四十一件の評価よりも①②に該当する一三六件にその存在意義をみいだすべきであろう。

①親征軍に編入された人々としては、122曹斌・124韓榮・129伍哈鑽兒^④・130住兒^⑤・136楊興・140傅鐸^⑥の六事例である。曹斌をはじめとするこの六人の親征軍との関わりを示すのは、つぎのごとくである。

122 「正統九年、熱水川に北征して二級を斬首し百戸に陞せらる。十四年、北征して未だ回らず、玉は嫡長男に係り、実授百戸を襲ぐ」

124 「正統九年、迤北にて達賊を殺敗するに功有り、試百戸に陞せらる。正統十四年、征進して未だ回らず、泰は嫡長男に係り、優給せらる」

129 「正統九年迤北にて征進するに功有り、指揮使に陞せらる。故す。子無し。祖の伍哈鑽兒、病瘥え、指揮使を襲ぐ。拾肆年、迤北にて征進して未だ回らず。堂叔比斗奴、借職す」

130 「正統九年、土河川にて胡寇を殺して功有り、指揮使に陞せらる。十年、故す。伯の住児、長男に係り、十一年、襲ぐ。十四年、迤北にて陣亡し、嗣無し。父の王原、旧名袁児、親弟に係り、本年、襲ぐ」

136 「正統九年、土河北川にて胡寇を殺して功有り、指揮僉事に陞せらる。十四年、土木にて失陥し、子無し。父楊政、親姪に係り、襲ぐ」

140 「正統九年、迤北熱水川にて賊を殺して功有り、正千戸に陞せらる。十二年、故す。父の傅鏜、襲ぐ。十四年、征進して未だ回らず。叔の傅鏜、借職す」

以上のごとく、六事例はいずれも正統九年（一四四四）の兀良哈征討に従事したあと、その五年後に編制された「親征軍に組み込まれ、土木の変の際に陣亡している。かれらが所属した衛所は、【付表】「兀良哈征討軍当事者一覧」によって知られるように、122長陵衛・124猷陵衛・129富峪衛・130富峪衛・136忠義前衛・140玉林衛である。

明代軍事組織の骨幹をなすのは、さきにもふれたように衛所である。明朝の開祖洪武帝によって創設された、この国軍の中核をなす衛所制度のもとで、親軍衛・京衛・外衛の三種類の衛所が全国に設置された。このうち、親衛と京衛は京師に置かれ、地方には外衛が置かれた。前述の繰り返しになるが、親軍衛は、皇帝に侍衛にするので、侍衛上直軍ともいうが、専ら侍衛・宮城守衛・皇陵護衛・皇城巡察の任にあたった。京衛は、五軍都督府（五府）に隸属し、永樂朝以後は班軍番上する外衛とともに常設的營、すなわち京營を組織するにいたった。外衛は、軍事を掌る機関として地方に置かれた都指揮使司（都司）に統べられた。都指揮使司は、行政を掌る布政使司、司

法を掌る按察使司とともに三司を形成し、地方政治の要をなした。その都指揮使司(都司)の上部機関は五軍都督府であり、都司は左右中前後のいずれかの都督府に隸属したのである。要するに、地方軍制の指揮系統は、皇帝―五軍都督府―都指揮使司―衛所ということになっていたのであった。洪武・建文二朝における親軍衛の数は、十二衛であり、「上十二衛」と呼ばれていた。ところが、その名称は、やがて「上二十二衛」という名称にとって代わられる。永楽政権が発足すると、あらたに十衛が増設されたためである。さらに宣徳年間にも増設され二十六衛となった。⁽⁷⁾

京衛は五軍都督府(五府)に隸属し、総計三十三衛設置されていた。五軍都督府は、左軍都督府・右軍都督府・中軍都督府・前軍都督府・後軍都督府によって構成された。京衛についてはこれ以外に「親軍に非ずして、都督府に隸せざる者」⁽⁸⁾とされる京衛であり、それは、「武功中衛・武功左衛・武功右衛・永清左衛・永清右衛・彭城衛・長陵衛・猷陵衛・景陵衛・裕陵衛・茂陵・泰陵衛・康陵衛・永陵衛・昭陵衛」の十五衛である。ただ、これらの全てが正統九年(一四四九)の兀良哈征討、ならびに十四年(一四四九)の土木の変段階において存在していたわけではない。陵墓衛に関していえば、永楽二十二年(一四二四)設置の長陵衛(太宗永楽帝の陵墓の防護衛)と宣徳元年(一二二六)設置の猷陵衛(仁宗洪熙帝)、および宣徳十年(一四三五)設置の景陵衛(宣宗宣徳帝)の三衛のみであった。

つぎに外衛であるが、これはその上部機関である五軍都督府・都司にそれぞれ統轄された。個々の衛所は、城守軍・屯軍・漕運軍などの軍種を保有した。さらにいえば衛所には班軍番上の義務を有するか否かの区別もあった。この班軍番上軍、すなわち京操軍と呼ばれる軍種は、太宗永楽帝に起源する。靖難の役の勝利(建文四年

（二四〇二）に収束）によって明朝第三代の帝位についた永楽帝は、その二十二年にわたる治世の間（二四〇二—一四二四）に、大軍を率いて五度塞北に出で虜庭を犁くこと三度に及んだ。永楽帝のこれらの北征は、五軍營・三千營・神機營よりなる京營——いわゆる三大營を基礎に展開された。しかしながら、三大營は、正統十四年（二四四九）八月十五日における土木の変の際に大打撃を被り、景泰帝の即位後、兵部尚書于謙は、従来の三大營の營兵中より精兵十万を選んで、十団營を組織した。そののち、京營制度は、十二団營・東西官庁・新三大營と、めまぐるしく推転し、国軍の主体として国力の伸縮とともに消長したが、かかる行軍体制の中核をなす京營自体は、京衛と在外衛所の班軍番上軍との二者で組成されたのである。かように、京營組織の一斑をなした在外衛所の番上軍は、南北直隸・河南・山東・陝西・山西等の衛所から調撥せられた。かかる班軍番上軍は、このように京營の組成・操練に参加するために番上するものであるから、これを略称して京操軍とも呼称したのである。京操軍は、毎年春戌と秋戌の両班に分かれて京師に番上した。これを上班といい、任務終了後の回衛を下班といった。要するに、班軍番上^⑧京操というものは、南北直隸・河南・山東・陝西・山西等の在外衛所の衛所軍が、京衛とともに京營を組成するために、春秋二班に分かれて、京師に番上する行為であった^⑨。

以上に概述した親軍衛・京衛・外衛と正統十四年（二四四九）七月編製の英宗親征軍との関わりに関して、兀良哈征討軍が親征軍に投入された事例を【付表】に拠ってみると、前述の如く、親軍衛の事例は無し、京衛は五軍都督府に所屬しない122長陵衛・124猷陵衛と後軍都督府所屬の129富峪衛・130富峪衛・136忠義前衛の五事例があり、外衛は後軍都督府山西行都司所屬の140玉林衛のみである。【付表】からみた限りでは、このように兀良哈征討軍として活動したものが英宗親征軍に組み込まれた事例は少ない。無論、これは【付表】に举例数が全事例からみれば滄海

の一粟にすぎないことも影響していよう。しかしながら、【付表】によると、兀良哈征討軍中の親軍衛は二十六衛のうち

【表B】

- 金吾右衛……………1 哈刺哈失・111 姜傀儡・112 曲政
- 府軍前衛……………107 門得・108 陶得・109 孫兒
- 燕山左衛……………●118 柴青
- 燕山前衛……………116 孫勝・●120 吳全

の四衛しか検出されない。これは、もともと親征軍ではない兀良哈征討軍には親軍衛の編入が少なかったことを物語るのではないかと考えられる。その故に、兀良哈征討軍・英宗親征軍に共通に組み込まれた事例の絶対数はかなり低かったのではないかと思量される。兀良哈征討軍中の京衛は、

【表C】

- 義勇左衛……………●110 馬旺
- 義勇右衛……………●141 旺貴
- 義勇後衛……………138 范永・139 康泰
- 龍虎衛……………147 鄭文

○忠義前衛……………133 趙成・●134 張善・136 楊興

○忠義後衛……………177 鄭真

○寬河衛……………121 郭福寿

○驍騎右衛……………●125 滕輔

○瀋陽左衛……………●126 高敬

○富峪衛……………129 伍哈刺失・130 達兒白・●131 金福・132 蔣英

の十衛である。左軍都督府から驍騎右衛・龍虎衛・瀋陽左衛、後軍都督府から富峪衛・寬河衛・忠義前衛・忠義後衛・義勇左衛・義勇右衛・義勇後衛の合計十衛、それに加えて、五軍都督府に隸属しない京衛十五衛のうち、

【表D】

○長陵衛……………2 李衡・122 曹斌

○猷陵衛……………●123 司貴・124 韓榮

の二衛が検出される。京衛の事例が親軍衛に比して多いのは、本来外衛とともに京營を形成し、軍行の際に主軸になるといふ職責を有していたためであり、兀良哈征討軍・英宗親征軍両方に関わった京衛衛所官の事例数が五件にのぼるのはその反映であろう。

ところが京衛とともに行軍を組織する外衛で、兀良哈征討軍・英宗親征軍共通に編入された事例はわずか一例に過ぎなかった。兀良哈征討軍の圧倒的多数を占めるのは、以下のように外衛であった。

【表E】

左軍都督府

○青州左衛（山東都司）……………114 張信・127 趙鑑・128 胡勝

○広寧前屯衛（遼東都司）……………113 李旺

○金州衛（遼東都司）……………137 宋福

○安東衛（遼東都司）……………144 朱旺

右軍都督府

○永昌衛（陝西行都司）……………142 任拳

中軍都督府

○揚州衛（直隸）……………115 周昇（のち金吾右衛に配転）

○歸德衛（河南都司）……………3 蔣斌

○懷遠衛（中都留守司）……………119 楊勝

後軍都督府

○鎮朔衛（直隸）……………117 常榮

○宣府前衛（万全都司）……………4 張貴・5 劉翱・6 白貴・7 郭洪・9 邢鑾・10 戴英・11 喬興・12 張敬・13 陳獅・14 王公

全・15 班得林・16 王仁義・17 盧春・18 王良・19 孟文礼・20 索能・21 杜貴・22 馬貳・23 高

岩・24 武選・25 王榮・26 王敬・27 張厥・28 宣子英・29 張志祥・154 孫剛

○宣府左衛（万全都司）……………30 楊景春・31 薛顯・32 閃友亮・33 張彦政・34 王謙・35 韓敏・36 楊魯・37 劉思讓・38 程敏・

39 賈真・40 竺湧・89 趙義・145 高整

- 開平衛(万全都司) …………… 41張能・42孫義・43崔旺・44郭全・45穆青・46王敏・47孟成・48王讓・49王思・50金福・51懷義・52白圭・53景全・54張山・55董貴・56徐勝・57張安・58閆公秀・59袁亮・60楊文貴・61葉貴・62韓貴・63陳広・64趙旺・65郭寧・66周通・67張還家・68苗政・69袁忠・70尚興・71孫銘祥・72馬麟・73慈友・74尼忠・75諸亮・76姜順・77劉材・78王深・79施庸・80劉貴・81王冕・82郭亮・143尹輔・146甄榮
- 保安衛(万全都司) …………… 83高榮・84魏貴・85康表・86岳能・87田広・88王海・148朱達・149程道・150馬成・151陶鑑・152鄧斌
- 蔚州衛(万全都司) …………… 90王瑄・91宋希文・92遼景敖・93張昇・94李友智・95鄭福・96高鑑・97劉增・98周剛・99張友・100林懋・101李榮・102王斌・103朱興・104任礼・105趙鑑・106田林・153陸鍾・155易海・156鄒淵
- 興和守禦所(万全都司) …………… 8徐貴
- 隆慶左衛(大寧都司) …………… 135李全
- 玉林衛(山西行都司) …………… 140傅榮・158鄭良貴・159張金・160文秀・161李嵩・162馬貴・163宋剛・164董榮・165李鑑・166董榮・167劉清・168丁浩
- 大同右衛(山西行都司) …………… 157孔旺・169毛永
- 雲川衛(山西行都司) …………… 170旺讓・171趙貴・172王珣・173崔復・174滕雲・175衛真・176王剛

ところが、かれらの中で親征軍に組み込まれた事例は、【付表】によれば、さきにふれたように、わずかに140傅榮↓傅鐸の一事例だけであった。これは単なる史料の偶然的残存性の反映であろうか。しかしながら、兀良哈征討

軍の外衛事例一四八件の中の一件といふこの僅少な数字は、史料の偶然の残存性のみでは十分な納得できる絵解きにはできない。兀良哈征討に従軍した外衛の衛所官軍の大多数はその戦役後原衛に戻っており、英宗の親征軍が編制されたときに再度それに組み込まれたものはきわめて少なかったことを意味しているのではないかと考えられる。そのことは、土木の変後の再出軍率を考えれば明白である。【付表】によると、兀良哈征討軍にして土木の変後の京師防衛戦に再出軍していない事例は、【表E】上に太字で示した二十六例である。換言すれば、残り一二二事例はすべて再出軍組であり、その再出軍率は一二二÷一四八〇・八二四、すなわち八二・四％の高率になる。

親軍衛・京衛の再出軍の事例については、【表B】【表C】【表D】上に●を付しておいたが、その率は【表B】が二二・二％、【表C】が三七・五％、【表D】二五％、【表C】【表D】両方の京衛を合わせると三五％にしかならず、外衛にして兀良哈征討軍の再出軍率が親軍衛・京衛に比して異常に高率を示していると断ぜざるをえない。外衛の兀良哈軍は英宗の親征軍に組成されなかったために逆に土木の変において殲滅されることなく、変後の京師防衛戦に再動員され、諸々の軍功をえて一気に陞進する機会をえたのである。

五十万と呼号する大軍編制の親征軍の中に、兀良哈征討において軍功を挙げた衛所官軍が組み込まれなかったことは、かれらにとつては残念なことであつたに違いない。なぜならば、その親征軍は、五年前の兀良哈征討における成功体験に照らせば、その赫奕たる戦果は自明のものともなされていたからである。したがって、英宗回鑾後の従軍者に対する褒賞もまた明々白々のことであつたからである。

ところが、正統十四年（一四四九）八月十五日の土木の変の発生とそれに因る明軍の壊滅的敗北は親征軍の面々を地獄に突き落とした。一方、親征軍に組み入れられず、幸いにも土木の変で覆滅を免れた兀良哈征討軍関係者は、

変後の京師防衛戦に再出軍して、押し寄せたモンゴル軍相手に様々な軍功をえて陞進することになった。親征軍への不参加は、結果的には、まさに一転して幸運が降って湧いたような「無妄之福」のチャンスとなったのであった。

注

- (1) 以上、親征軍に関する事項は、拙著『明代中国の軍制と政治』（国書刊行会、二〇〇一年）「前編第一章 親征軍」ならびに『モンゴルに拉致された中国皇帝 英宗の数奇なる運命』（研文出版、二〇〇三年）参照。
- (2) 拙稿「明代、以克列蘇の戦役考」（『中央大学文学部紀要』史学第五八号、二〇一三年）。
- (3) 前掲拙稿「明代、以克列蘇の戦役考」。
- (4) 129の事例では正統九年（一四四四）の兀良哈征討に従事したのは伍哈刺失であったが、その後死去したので正統十四年（一四四九）時には伍哈鑽児がその後を襲いでいた。
- (5) 130の事例も注（4）と同様、達児白が兀良哈征討に加わったが、その後死去したので、後嗣となった住児が親征軍に組み入れられた。
- (6) 事例140も129・130と同様に、傅榮が兀良哈征討に従ったが、正統十二年（一四四七）に死去したので、後嗣となった傅鐸が親征軍に編入された。
- (7) 親軍衛の増設過程とその背景については、拙稿「天順五年の首都騒乱」（『中央大学文学部紀要』史学第五五号、二〇一〇年）参照。
- (8) 『明史』卷七六、職官志五。
- (9) 前掲拙著『明代中国の軍制と政治』「前編第一章 班軍番上制」参照。

【付表】「元良哈征討軍当事者一覽」		戦闘場所	変後の官職	典拠
No.	当事者	出身	土木の変前の衛名・職	
1	哈刺哈失	山後人	金吾右衛指揮僉事	五〇―一八七
2	李衡	薊洲	長陵衛副千戸	五三―二〇九
3	蔣斌	武進県	婦徳衛副千戸	六二―七一
4	張貴	潁上県	宣府前衛指揮指揮使	六九―一六六
5	劉翱	嶧県	宣府前衛百戸	六九―一九七
6	白貴	代州	宣府前衛総旗	六九―二〇四
7	郭洪	景陵県	宣府前衛正千戸	六九―二一一
8	徐貴	泰州	興和守禦所試百戸	六九―二一三
9	邢鑾	忻州	宣府前衛百戸	六九―二一七
10	戴英	興化県	宣府前衛副千戸	六九―二三四
11	喬興	忻州	宣府前衛小旗	六九―二三八
12	張敬	忻州	宣府前衛試百戸	六九―二三九
13	陳獅	忻州	宣府前衛試百戸	六九―二四一
14	王公全	忻州	宣府前衛総旗	六九―二四六
15	班得林	忻州	宣府前衛総旗	六九―二四八
16	王仁義	忻州	宣府前衛総旗	六九―二四八
17	盧春	忻州	宣府前衛総旗	六九―二五八
18	王良	忻州	宣府前衛総旗	六九―二六五
19	孟文礼	忻州	宣府前衛総旗	六九―二七一
			景泰元年紫荆関等処	
			本年居庸関、本年紫荆関等処、景泰元年宣撫城	
			副千戸	
			東、六月宣府南門外洋河南坡	
			正統十四年居庸関、紫荆関等処、景泰元年南門	
			外、洋河橋等処、東南二小門外	
			十四年紫荆関等処	
			正統十四年居庸関、二十七日紫荆関	
			居庸関、紫荆関、景泰元年三月宣府二小門外	
			副千戸	
			十四年紫荆関、東南二門外、洋河南坡	
			副千戸	
			十四年居庸関、二十七日紫荆関	
			百戸	
			十四年紫荆関	
			百戸	
			景泰元年南関東南二小門	
			景泰元年宣府東門外、六月宣府南門	
			冠帶総旗	
			試百戸	
			正統十四年井子凹、宣府東南二小門外	
			試百戸	

20	索能	忻州	宣府前衛總旗	正統十四年紫荊關	試百戶	六九一二七八
21	杜貴	忻州	宣府前衛總旗		百戶	六九一二八一
22	馬貳	忻州	宣府前衛試百戶	本年居庸關水澗口、紫荊關	署副千戶	六九一三〇七
23	高岩	崞縣	宣府前衛試百戶	十四年居庸關、景太元年宣府城東	百戶	六九一三一二
24	武選	崞縣	宣府前衛總旗	十四年紫荊關、本年居庸關	百戶	六九一三一七
25	王榮	崞縣	宣府前衛總旗	十四年紫荊關	試百戶	六九一三二三
26	王敬	崞縣	宣府前衛小旗	十四年紫荊關、景太元年宣府南橋	試百戶	六九一三二七
27	張厥	崞縣	宣府前衛小旗	正統十四年紫荊關、景太元年六月宣府南洋河	試百戶	六九一三三〇
28	宣子英	崞縣	宣府前衛總旗	十四年居庸關	試百戶	六九一三三四
29	張志祥	五台縣	宣府前衛總旗	景太元年宣府洋河橋南坡	試百戶	六九一三四〇
30	楊景春	大同縣	宣府左衛總旗	景泰元年東南二小門、六月南門外	百戶	六九一三七一
31	薛顯	嘉定縣	宣府左衛正千戶	十四年紫荊關、洋河橋	指揮同知	六九一三七八
32	閃友堯	大同縣	宣府左衛總旗	十四年十月紫荊關	百戶	六九一三八六
33	張彥政	大同縣	宣府左衛小旗	十四年紫荊關、景泰元年宣府南關東南二小門外	試百戶	六九一四〇六
34	王謙	江寧縣	宣府左衛副千戶	景泰元年宣府南門外	正千戶	六九一四一七
35	韓敏	沁州	宣府左衛總旗	十四年紫荊關、居庸關	百戶	六九一四三一
36	楊魯	遷安縣	宣府左衛副千戶	景太元年宣府城東、本年洋河橋	正千戶	六九一四三七
37	劉思讓	山陰縣	宣府左衛總旗	十四年十月初十日居庸關、二十七日紫荊關	百戶	六九一四六五
38	程敏	徐州	宣府左衛副千戶			六九一四七二
39	賈真	蔚州	宣府左衛總旗	十四年紫荊關	試百戶	六九一四七七
40	竺湧	奉化縣	宣府左衛試百戶	景泰元年宣府城東、洋河南坡	副千戶	六九一五一五
41	張能	昌樂縣	開平衛開平驛百戶	正統十四居庸關、二十七日紫荊關五郎河	正千戶	七〇一八
42	孫義	沂州	開平衛開平驛百戶			七〇一六
43	崔旺	昌樂縣	開平衛開平驛總旗	正統十四年紫荊關	試百戶	七〇一一七

44	郭全	興化県	開平衛開平驛小旗	十四年居庸関、二十七日紫荆関	試百戸	七〇一九
45	穆青	固安県	開平衛浩領驛試百戸	正統十四年十月居庸関、二十七日紫荆関	副千戸	七〇二三
46	王敏	涇陽県	開平衛浩領驛總旗	十月初十日居庸関、二十七日易州紫荆関	試百戸	七〇二五
47	孟成	鄒平県	開平衛浩領驛總旗	十四年居庸関	試百戸	七〇二九
48	王讓	固安県	開平衛浩領驛小旗	十四年居庸関二十七日紫荆関陣	試百戸	七〇三〇
49	王思	猗氏県	開平衛浩領驛小旗	十四年居庸関陣亡	試百戸	七〇三一
50	金福	大興県	開平衛浩領驛總旗	九年居庸、紫荆関	試百戸	七〇三二
51	懷義	江寧県	開平衛浩領驛總旗	紫荆関	試百戸	七〇三三
52	白圭	忻州	開平衛浩領驛小旗	十四年居庸関、二十七日紫荆関五郎河	試百戸	七〇三七
53	景全	猗氏県	開平衛浩領驛小旗	居庸関	試百戸	七〇三九
54	張山	鄒平県	開平衛浩領驛總旗	居庸関	試百戸	七〇三九
55	董貴	沢州	開平衛豊峪驛總旗	居庸関	試百戸	七〇四一
56	徐勝	沢州	開平衛豊峪驛總旗	十四年居庸関、紫荆関五郎河	百戸	七〇四一
57	張安	濟源県	開平衛豊峪驛總旗	居庸関、紫荆関	百戸	七〇四二
58	閆公秀	沢州	開平衛豊峪驛試百戸	十四年居庸関	同衛塞峰驛試百戸	七〇四四
59	袁亮	濟源県	開平衛總旗	十四年居庸関	百戸	七〇五〇
60	楊文貴	蔚州	開平衛雲門驛總旗	十四年居庸関、二十七日紫荆関	百戸	七〇五三
61	葉貴	東莞県	開平衛雲門驛總旗	本年十月居庸関、紫荆関	百戸	七〇五四
62	韓貴	蒲州	開平衛雲門驛總旗	正統十四年德勝門外、二十三日垣州固安揚宣務	百戸	七〇五五
63	陳広	高郵州	開平衛雲門驛總旗	十四年居庸関、紫荆関	百戸	七〇五五
64	趙旺	泰州	開平衛雲門驛總旗	十四年居庸関、二十七日紫荆関	百戸	七〇六〇
65	郭寧	鄒平県	開平衛雲門驛總旗	十四年居庸関	試百戸	七〇六一
66	周通	蔚州	開平衛雲門驛總旗	十四年紫荆関	試百戸	七〇六二
67	張還家	恩県	開平衛雲州驛試百戸	正統十四年十居庸関、二十七日紫荆関五郎河	副千戸	七〇六八

68	苗政	沢州	開平衛雲州駐試百戶	十四年居庸関、紫荆関	副千戶	七〇一六九
69	袁忠	固安県	開平衛総旗	十四年居庸関、紫荆関	同衛環州駐百戶	七〇一六九
70	尚興	固安県	開平衛総旗	十四年十月居庸関、紫荆関	同衛黄岩駟百戶	七〇一七一
71	孫銘梓	掖県	開平衛試百戶	正統十四年居庸関	副千戶	七〇一七二
72	馬麟	盧氏県	開平衛雲州駐総旗	十四年十月居庸関、二十七日紫荆関	百戶	七〇一七二
73	慈友	塩山県	開平衛雲州駟小旗	十四年居庸関、紫荆関	試百戶	七〇一七四
74	尼忠	益都県	開平衛総旗	十四年居庸関	試百戶	七〇一七七
75	諸亮	崑山県	開平衛試百戶	十四年紫荆関等処、景泰元年居庸関等処	副千戶	七〇一七九
76	姜順	諸城原	開平衛百戶	十四年紫荆関等処、景泰元年居庸関等処	百戶	七〇一八一
77	劉材	和州	開平衛総旗		百戶	七〇一八二
78	王深	寧海県	開平衛試百戶		百戶	七〇一八四
79	施庸	臨淮県	開平衛総旗	正統十四年德勝門、固安県埧州、揚宣務	副千戶	七〇一八五
80	劉貴	陽山県	開平衛試百戶	十四年居庸関、紫荆関五郎河	百戶	七〇一八六
81	王冕	鳳陽県	開平衛試百戶	十四年十月德勝門外	試百戶	七〇一八七
82	郭亮	盧龍県	開平衛黄崖駐総旗	十四年十月居庸関	署都指揮僉事	七〇一八九
83	高榮	懷仁県	保安衛指揮使	景泰元年宣府城東	試百戶	七〇一〇五
84	魏貴	斉河県	保安衛総旗	十四年居庸関	試百戶	七〇一四二
85	康表	交城県	保安衛小旗	十四年德勝門外、固安県渾河、霸州	試百戶	七〇一六二
86	岳能	樂安県	保安衛総旗		試百戶	七〇一八〇
87	田広	歴城県	保安衛未併鎗総旗戸丁	紫荆関洋河南坡	試百戶	七〇一九一
88	王海	武邑県	保安衛小旗		保安衛試百戶	七〇一九六
89	趙義	朔州	宣府左衛小旗	十四年居庸関、紫荆関、五郎河	副千戶	七〇二一一
90	王瑄	丹徒県	蔚州衛正千戶		副千戶	七〇二六一
91	宋希文	錦州	蔚州衛試百戶	十四年紫荆関、景泰元年洋河橋	副千戶	七〇二七六

92	遼景敖	繁峙県 蔚州衛總旗	十四年并子凹、景泰元年宣府南門外洋河坡	百戸	七〇一三〇一
93	張昇	繁峙県 蔚州衛試百戸	十四年紫荊関、景泰元年宣府門外洋河橋	副千戸	七〇一三〇八
94	李友智	応州 蔚州衛總旗	十四年神峪口	試百戸	七〇一三一七
95	鄭福	臨海県 蔚州衛正千戸		百戸	七〇一三二〇
96	高鑑	灤州 蔚州衛總旗	十四年紫荊関、景泰元年雷公山等処	百戸	七〇一三二一
97	劉増	宣平県 蔚州衛試百戸	十四年并子凹、景泰元年宣府南門東門二小門、南門外洋河坡	副千戸	七〇一三二八
98	周剛	高陽県 蔚州衛總旗	十四年水澗口	試百戸	七〇一三三七
99	張友	崞県 蔚州衛小旗	正統十四年德勝門外、固安県揚宣務等処	試百戸	七〇一三三九
100	林懋	偃遊県 蔚州衛試百戸	十四年居庸関水澗口	百戸	七〇一三四五
101	李榮	東阿県 蔚州衛總旗	景泰元年三月宣府南二小門外	署試百戸事	七〇一三四七
102	王斌	咸陽県 蔚州衛試百戸	景泰元年紫荊関	百戸	七〇一三六一
103	朱興	新建県 蔚州衛總旗	十四年紫荊関	試百戸	七〇一三六六
104	任礼	河曲県 蔚州衛試百戸	十四年并子凹、景泰元年宣府城東	署副千戸	七〇一三七五
105	趙鑑	孝義県 蔚州衛總旗	十四年德勝門、固安楊宣務、霸州	副千戸	七〇一四四八
106	田林	汾州 蔚州衛小旗	居庸関、紫荊関	試百戸	七〇一四六三
107	門得	大興県 府軍前衛副千戸			四九一六三
108	陶得	睢寧県 府軍前衛副千戸			四九一八八
109	孫兒	濟寧県 府軍前衛小旗		試百戸	四九一〇二
110	馬旺	宛平県 義勇左衛小旗		試百戸	四九一〇八
111	姜傀儡	応昌 金吾右衛指揮使			五〇一八
112	曲政	任丘県 金吾右衛指揮僉事			五〇一九四
113	李旺	宝坻県 広寧前屯衛指揮僉事			五〇一三七五
114	張信	三河県 青州左衛指揮僉事			五〇一五〇六

115	周昇	山後人	金吾右衛指揮使		五〇一五五六
116	孫勝	山後人	燕山前衛指揮僉事		五〇一五七九
117	常榮	樂陵縣	鎮朔衛指揮同知		五一一七〇
118	柴青	固安縣	燕山左衛指揮同知		五一一一七七
119	楊勝	樂安縣	懷遠縣正千戶		五一一二九七
120	吳全	無為州	燕山前衛副千戶		五二一三〇一
121	郭福壽	宿遷縣	寬河衛正千戶		五三一〇
122	曹斌	江都縣	長陵衛百戶		五三一三三七
123	司貴	寶坻縣	獻陵衛百戶		五三一三三三
124	韓榮	寶坻縣	獻陵衛試百戶		五三一三三九
125	滕輔	盱眙縣	驍騎右衛副千戶		五四一七四
126	高敬	襄陽縣	瀋陽左衛總旗		五四一二七九
127	趙鑑	灤州	青州左衛副千戶		五五一一〇〇
128	胡勝	章丘縣	青州左衛副千戶		五五一一〇三
129	伍哈剌失	山後人	富峪衛指揮指揮使	拾肆年迤北征進未回	六六一二二
130	達兒白	山後人	富峪衛指揮使	十四年迤北陣亡	六六一一三
131	金福	山後人	富峪衛指揮僉事	十四年高粱橋	六六一二六
132	蔣英	巢縣	富峪衛副千戶		六六一五八
133	趙成	山後人	忠義前衛指揮使		六六一二一一
134	張善	臨邑縣	忠義前衛正千戶		六六一二二三
135	李全	灤州	隆慶左衛都指揮僉事	固安霸州等處、景泰元年五月宣府東城	六六一二四七
136	楊興	寶坻縣	忠義前衛指揮僉事	十四年土木失陷	六六一二七〇
137	宋福	遼陽縣	金州衛指揮指揮同知		六六一三二四
138	范永	永清縣	義勇後衛副千戶		六六一三三一

139	康泰	山後人	義勇後衛副千戸	十四年征進未回	六六一四二八
140	傅榮	高密県	玉林衛正千戸	十四年西直門外	六六一四四四
141	旺貴	六合県	義勇右衛副千戸		六七一六
142	任拳	昌平県	永昌衛指揮僉事		六七一三六
143	尹輔	和州	開平衛指揮同知		六九一六九
144	朱旺	合肥県	安東衛指揮使	十四年居庸関、紫荆関	六九一二〇九
145	高整	広昌県	宣府左衛小旗	十四年居庸関、景泰元年南門外洋河橋橋	六九一四六三
146	甄榮	固安県	開平馱浩嶺驛総旗	紫荆関、居庸関	七〇一二八
147	鄭文	江陰県	龍虎衛指揮僉事		七〇一二一
148	朱達	和州	保安衛指揮僉事		七〇一二三
149	程道	曹県	保安衛指揮僉事		七〇一三一
150	馬成	武清県	保安衛総旗	十四年十月居庸関水澗等口、紫荆関	七〇一七八
151	陶鑑	寿県	保安衛副千戸		七〇一九三
152	鄧斌	無錫県	保安衛総旗	居庸関	七〇二〇七
153	陸鍾	呉県	蔚州衛副千戸		七〇二三四
154	孫剛	齊東県	万全都司都指揮僉事		七〇二三五
155	易海	万載県	蔚州衛副千戸	宣府城東	七〇二五四
156	鄒淵	錢塘県	蔚州衛副千戸	紫荆関、景泰元年宣府洋河南坡	七〇二六二
157	孔旺	祁県	大同右衛指揮使		七一一三七四
158	鄭良貴		玉林衛総旗	十四年黒峪口、蒲州	七一一四八九
159	張金	曲沃県	玉林衛総旗	景泰元年蒲田宮	七一一五〇八
160	文秀	曲沃県	玉林衛総旗	景泰元年東岳廟前	七一一五一二
161	李嵩	翼城県	玉林衛総旗	景泰元年蒲州宮	七一一五一四
162	馬貴	曲沃県	玉林衛小旗	十四年黒峪口	七一一五一六
					総旗

163	宋剛	曲沃県 玉林衛小旗	十四年櫃子山黒峪口、景泰元年蒲州營、四月黄土嶺、五月東嶽廟	百戸	七二一五二二
164	董榮	曲沃県 玉林衛小旗	十四年黒峪口、十月定州、景泰元年大同北門雷公署	副千戸	七二一五二二
165	李鑑	曲沃県 玉林衛軍小旗	景泰元年蒲州營、四月黄土嶺、七月長安嶺	百戸	七二一五三三
166	董榮	曲沃県 玉林衛小旗	景泰元年大同北門外	総旗	七二一五四六
167	劉清	曲沃県 玉林衛小旗	景泰元年東嶽廟	総旗	七二一五四七
168	丁浩	曲沃県 玉林衛総旗	景泰元年蒲州營	試百戸	七二一五六八
169	毛永	清河県 大同右衛指揮僉事	正統十四年黒峪口等処	指揮使	七二一八一
170	旺讓	合肥県 雲川衛試百戸	十四年黒峪口	副千戸	七二一一四
171	趙貴	靈璧県 雲川衛試百戸	十四年櫃子山	試百戸	七二一二八
172	王珩	仁和県 雲川衛試百戸	十四年櫃子山	試百戸	七二一五五
173	崔復	洪洞県 雲川衛総旗	十四年黒峪口、景泰元年北門雷公山石仏寺	試百戸	七二一六四
174	滕雲	丹徒県 雲川衛試百戸	十四年黒峪口、景泰元年北門雷公山石仏寺	試百戸	七二一八四
175	衛真	浮山県 雲川衛小旗	景泰元年本城西門外	総旗	七二一九五
176	王剛	浮山県 雲川衛小旗	景泰元年本城西門外	総旗	七二一九七
177	鄭真	大寧人 忠義後衛指揮僉事	景泰元年本城西門外	総旗	七三二〇三